小学生的感謝スキルの習得を目標としたソーシャルスキル教育の効果に関する実験的検討（1）
——児童による自己評定結果の分析——
○藤枝静男・相川充
（川口短期大学・筑波大学）

1. 目的
藤枝・相川（2012）は小学生を対象に「ありがとうを伝える」スキル（以下、感謝スキル）の習得を
目標としたソーシャルスキル教育（以下、SSE）を行った。一定の成績があったことを報告した。しかし、
この研究では統制学級が設定されておらず、SSEの成果と自然変動を分離できなかった。本研究
では実験学級と統制学級を設定しSSEの効果をより厳密に検討した。第二の目的として、感謝スキルの
習得が児童の対人関係に及ぼす効果についても検討した。効果測定では児童による自己評定、仲
間評定、教師評定、保護者評定を採用した。本稿では児童による自己評定の結果を報告する。

2. 方法
SSE：都内公立小学校5年生の実験学級（38名）でお
いて、平成24年10月から第2週から第4週の間に週
1回、計3回、SSEを行った。統制学級（37名）では
通常の授業を行った。

質問紙調査：調査は両学級において、SSE開始1週
間前（pre）、SSE終了1週間後（post）、2学期終了
時（follow）の計3回行われた。調査は、担任教師
が子どもに個人情報保護、成績とは関係しないと
いった倫理的配慮を読みこみで説明し、子ども
の同意を得てから行われた。なお、子どもの保護
者に対しても事前説明を行い、同意を得た。

使用した尺度：感謝スキルの習得を測定するため
に児童用感謝スキル尺度（藤枝・相川、2012）の4項
目を採用した。第二の目的を検証するために、藤
枝・相川（2012）にならいソーシャルサポート尺度
4項目、学級生活感受性尺度4項目を採用した。
また、児童が相互に「ありがとう」を伝え合うこ
とで自己価値、自尊感情が向上すると推測し、桜
井（1983）の認知されたコンピテンス測定尺度（日
本語版の）の自己価値因子の3項目、中山ら（2011）の
児童用自己感尺度の対人関係因子の5項目を採
用した。さらに、感謝スキルの習得が対人葛藤場
面における解決能力の一つである「折り合い能
力」を高めることを予測した。「折り合い能力」を
「葛藤場面で、相手の意見を聞いて理解しようと
して、たとえ納得できなくても、それ以上主張す
ることなく、自分の気持ちを切りかえて楽しもう
とすること」と定義し、新たに4項目を作成した。